

大学生の共同学習タスクにおける情報共有

武田 将季

私たちは日常生活の中で、他人と知識や情報を共有することによって様々な課題解決を行っている。最近では、従来のような対面の環境における情報共有だけでなく、ソーシャルメディアやクラウドコンピューティングを活用した電子的な環境における情報共有が行われるなど、情報共有の形態も多様化している。しかし、これまでの研究では、電子的な環境における情報共有のみを扱ったものが多く、電子的な情報共有と対面の環境を組み合わせた情報共有の実態が十分に明らかにされているとは言えない。

本研究では、電子的な環境での情報共有と対面のコミュニケーションによる情報共有が人々にどのように位置づけられているのかを明らかにすることを目的とした。そのために、まず、電子的な環境における情報共有だけでなく対面のコミュニケーションの場を簡単に用意することができ、多様な形態の情報共有が行われる場として大学の授業における共同学習タスクという場面を設定した。その上で、電子的な環境と対面のコミュニケーションの場の両方による情報共有を扱い、それらをどのような場面で、どのように組み合わせで、どのような内容の情報を共有しているのかを調査した。調査は授業時間内及び授業時間外においてグループの中で何らかの情報のやり取りが行われるたびに使用した手段や内容等をワークシートに記録してもらうという形式をとった。そして、共同学習タスク終了後にグループにおける情報共有に対する認識についての質問紙調査を行い、質問紙の完成度、メンバーの参画度、グループ内における情報共有に対する評価を5件法で評価させた。

回収したワークシートから情報共有が行われた場面、内容、手段、共有した相手という観点から内容分析を行った。その結果、多くのグループは意見を出し合い、そこから意思決定を行うような場面においては対面の環境における情報共有を行っていた。反対に、議事録や成果物等のデータを共有する際には電子的な環境において情報共有を行っていることが明らかになった。また、対面の環境における情報共有の方が情報を素早く確実に伝えることが出来る手段として有効であったと評価する内容が共同学習タスク終了後の質問紙調査から得られた。それに対して電子的な環境における情報共有では、共有したものに対して意見を出し合う際に積極的に参加する人が減ったことを指摘する内容が目立った。

このように本研究では、人々は共同学習タスクの中で意思決定を伴う場合には対面の環境と電子的な環境の両方で情報共有を行っていることが明らかになった。一方で、電子的な環境における情報共有のみではプロセスを進行させることが出来ず、対面の環境を支える形で活用されていることが明らかになった。これは情報共有について議論する場合、どちらか一方ではなく、対面の環境及び電子的な環境の両方に着目する必要があることを示したものと言える。

(指導教員 歳森 敦)